

Washington Women's Dialogue

日本人女性記者が米国の主要紙であるウォール・ストリート・ジャーナルの記者として第一線で活躍を続けている。今回ご紹介する林由佳さんは、日本生まれ日本育ちでありながら、一貫して英語で勝負し、徹底的に取材して納得した記事を書くという姿勢を貫いてこられました。ロイター通信、ダウ・ジョーンズ経済通信で記者として東京、ニューヨークで勤務後、ウォール・ストリート・ジャーナルへ転職し、東京特派員を経て副支局長として11年間東京で勤務。現在はワシントンDC支局で金融規制について記者として活躍していらっしゃいます。これまで、どのような選択をされて現在に行きついたのか、詳しくお話をお伺いしました。



林由佳さん ウォール・ストリート・ジャーナル記者（元東京副支局長）

ロイター通信、ダウ・ジョーンズ経済通信で記者として東京、ニューヨークでの勤務を経て、2004年にウォール・ストリート・ジャーナルへ。東京特派員、副支局長として11年間、日本の経済、政治、外交について取材、執筆。2015年よりワシントン支局で金融規制の取材を担当する。コロンビア大学でジャーナリズム専攻修士号取得。早稲田大学政治経済学部卒業。

—今のお仕事の内容を教えてください—

ウォール・ストリート・ジャーナル（WSJ）のワシントンDC支局の記者として働いています。私の担当しているのはアメリカの政府の金融規制です。政府の政策がどのように消費者に関係するのか、彼らの関心事である住宅ローン、学生ローンなどにどう影響するのかという記事を書いています。ワシントンの前は東京支局で副支局長として、日本の経済、政治、外交など幅広い分野をカバーし、特に福島原発事故の取材もしていました。

—ジャーナリストになったきっかけは？—

大学を出たのはバブルの終わり頃。高校生のときにアメリカに交換留学し、英語も多少できたし大学で経済を専攻したので、就職には困らない時期でした。私は当時、まずアメリカに留学して国際関係の勉強をし、世界銀行や国連で働きたいという希望を持っていました。ただ、大学院に行くにはまずお金を稼がなくてははいけない。そこで英語を使って金融業界で何年か働きたいと思って、外資系の金融機関を受けたのですが、なぜか全部落ちました。第2希望はジャーナリストになることでした。日本で新聞記者になる人は「4字熟語」をはじめとして、たくさん勉強しなくてはならないのですが、私はあまり勉強していなかった。なので、あまり期待していなかったのですが、3社受けて2社内定ができました。そこできっと向いているのかもしれないと思いこの道に入り、やってみたら面白かった。いろいろ悩みながら進んできましたが、気が付いてみると30年以上やってきたという感じです。

—東京からワシントンDCへ来るきっかけは？—

東京では副支局長として、若い人たちへ指導したりしてやりがいもありました。そのまま東京で仕事を続けていく選択肢もあったのですが、何かもう一回アメリカで力を試したい、という思いがあった。また、子供がちょうど大学に入る時期だったこともあり、希望して4年前にワシントンに転勤しました。

—日本とアメリカ、両方で働いていらっしゃるんですが、どういうタイミングでアメリカにくることになったのですか？

アメリカに住むのは4回目です。最初は高校生で行った交換留学。大学では経済を専攻したら周りは男性ばかりで居心地はあまり良くなかった。就職面接で「結婚したら仕事を辞めるのか」といった質問ばかりする日本企業ではなく、そういうことを一切聞いてこなかった外資系の通信社に就職しました。その当時、世界各国から日本で働きたいというジャーナリストが東京に集まっていた、そういった同僚と一緒に仕事をしていると、あまりに勉強していない自分が恥ずかしくなった。2年ほど仕事をしたところで逃げるようにアメリカの大学院に留学した。コロンビア大学でジャーナリズムを勉強した後帰国し、記者仲間のアメリカ人の夫と結婚。通信社で働いていました。

アメリカの会社に働く以上、やはり本場のアメリカで自分の力を試したいと思っていたところ、NY本社に転勤するチャンスがあり、金融関係の記事を5年ほど書いていました。そのあと、東京でポジションに空きがでたから行かないか、といわれWSJの東京特派員として日本に戻りました。東京に転勤して最初は金融関係を担当していましたが、そのうち国際関係や政府、震災の後には福島の人たちを追いかけたりして幅広い分野をカバーしていました。10年ほど東京にいたのですが、後半は副支局長として、若い人たちへ指導したりしてやりがいもありました。そのまま東京で仕事を続けていく選択肢もあったのですが、10年ほど東京で仕事して、何かもう一回アメリカで力を試したい、という思いがあった。



ウォール・ストリート・ジャーナルのオフィスにて

—ジャーナリストのお仕事をしていて、つらかったこと、楽しいことは何ですか？

日本にいて日本の記事を書くことは楽しい。実際に起きている現象をみて、多くの人にわかりやすく説明できる自信がある。けれど、東アジアや日本のことを一生懸命記事に書いても、アメリカにいる読者は興味がある人は読むけれど、多数のアメリカの読者に読んでもらうことはとても難しい。



JSIEのWWDセッションで司会をする様子。

日本経済が繁栄していた時は、日本の記事を書いても書いても書ききれないくらい扱っていましたが、日本の経済が勢いを失い、その代わりに中国が台頭してくると、日本の記事に対する需要は少なくなっていきました。NY本社のEditorに「(私の記事を)使ってください」といっても使ってくれなかったりするわけです。そういうことがどんどん増えてきた。そういうのもあって、東京でフラストレーションがたまって少し疲れてきたことも事実です。ワシントンにきて、今は日本のことは全く書いていません。アメリカの消費者が自分たちの貯金はどうなるのか、住宅ローンはどうなるのか、日々のお財布に関わる記事についてはすごく沢山の人が読んでくれる。そういう人たちから「こういうこと書いてくれてどうもありがとう」とか「私もこういう経験があるのでぜひ聞いてほしい」など、反応が多いという意味ではとても楽しいです。

—ジャーナリストになる方は子供の頃から好奇心旺盛な方が多いのではないかと思いますのですが、どんな子供時代を過ごしましたか？

生まれも育ちも日本です。小中学校は公立学校へ行ったのですが、低学年の時は違和感がなかったのに、小学校の高学年くらいからずっと窮屈だった。私の人生で一番暗い時期は、小学校の後半から中学校にかけてです。私は、やたらにいろんなことを「なんでそうなの?」「どうして?」と納得するまで聞いてしまう性格。そのため先生から煙たがられて、居心地が悪かった。そこで、学校ではあまりしゃべらないことにしようと決め、家に帰って本をたくさん読んだり、英語の勉強などして羽を広げていました。高校から私立に行って、窮屈さがなくなりだいたい楽しくなりました。大学生の頃は、学生なんて誰も相手にしてくれないと思って一人で悩みを抱えていましたが、今この年になると、一緒に助けたいと思うようになった。周りの人も若い人のために時間を作るということをしている人が多いので、どんどん相談にのってもらったらよかったですと思いました。

Washington Women's Dialogue

――失敗談があったら教えてください。

失敗は数えきれないほどあります。特にメールなど間違った人へ送ってしまったたり、間違ったことを書いてしまうこと。忙しいときは何百もメールを送るので、確認を怠ってしまうと、そういうことになります。同僚に愚痴を書いていたそれが上司のところ間違えて送られていたとか。今でも思いだすのは、東京支局にいたころの失敗です。取材の件でやり取りしている際、何を間違ったかインタビューする相手の人の肩書を書くのをわすれて呼び捨てになっていたメールが送られてしまった。広報の人がかんかん怒って、私とは何カ月も口をきいてくれなかったことがあります。メールは必ず見直しすることが何よりも大事です（笑）。

――ジャーナリストの魅力、記者として大事にしていることは何ですか？

ジャーナリストの仕事は楽しい仕事です。でも周りはアメリカ人ばかり。私はNativeでないの長い間、母国語でない英語で勝負しなければいけないのは、大きなハンディだと思ってきた。でも、さすがに20年、30年とキャリアを積んでいくうちに、この国には、英語を母国語としない移民で成功している人は沢山いるから、もうそれは言い訳にならない、と思うようになった。そして今は、英語で書くことによって、日本語で書くより圧倒的に多くの人に自分の記事を読んでもらえる。そのことに大きな意義があると思っています。他の人と違うことを心配せずに、「ノー」というところは自分の意見を言い、一匹狼的に仕事をしています。



2019年3月 Tomodachi Initiative 研修で日本から来た50名の女子学生を前にパネルセッションに参加。

――いろんな社会的地位の高い人やなかなか会えない人にもインタビューできると思いますが、これまで印象に残った方はいますか？

私は、どちらかという、そういう方たちより普通の方たちのインタビューから感銘を受けることが多いですね。3.11の東日本大震災後の福島によく取材に行っていたのですが、仮設住宅に入っている方が「私の村ではこの時期になると梅の花がそこらじゅうとてもきれいに咲くんです。今年はそれを見られないのが、なんと言っても一番寂しいです。」と言ったのを聞いたとき、涙が止まらなかったことがあります。

ジャーナリストとして大事にしていることは、常にフェアであること、固定観念にとらわれず、好奇心を失わないこと。そして、取材が完了と思ったところで、もう一件取材をしてみる。それと、できる限り沢山活字を読むこと、ですね。一番の醍醐味は、「記者」だということでもいろんな人に会える。記者証を持っているだけで、いろんな人が心を開いてくれる。それだけ自分を信用してくれる、ということなので感謝している。多くの人に読んでもらうために、これからも頑張っていていい記事を書いていきたいと思っています。

――物事に真摯に向かっていく姿勢、一つ一つの積み重ねで今日があるのですね。WSJの紙面で林由佳さんの書いた記事を見つけて読むのが、これからとても楽しみです。今後ますますご活躍をお祈りしております。

(インタビュー・文責) JSIE代表 村上博美

JSIE
Japan Institute for
Social Innovation and
Entrepreneurship

このインタビュー記事の内容はさくら新聞2019年7月27日号に記載されました。

www.jsie.net

Japan Institute for Social
Innovation and
Entrepreneurship